



2
「夢」

二 ★ 夢

子供の想像力はすごいとよく言う。

大人の想像力には限界があるというニュアンスを感じる。自分にはこんな思いつかない、と。

子供の想像力は確かに豊かだ。僕の記憶の一番奥にある子供時代の将来の夢は、きかんしゃトーマスになることだった。

プリキュアになる。うさぎになる。あるいは、扇風機になる。子供は常識やルールに縛られず、自由な世界を疑うことなく生きていく。もう一度、あの頃のように自由な発想で世界を見ることができたら……実は誰にでも身近に、叶えられる場所がある。それは夢の中だ。

今年の初夢はものすごく意味不明だった。内容はこう。

絵文字には顔の種類がいくつもあるが、その中に、サングラスをかけて笑っているものがある。



そうそう。この絵文字だ。まず、夢の中に登場したこの顔が、「自分」として認知されている。夢を見始めてすぐ、「あ、これは僕だ。」とわかった。それで体はというと、ものすごく雑な棒人間。下手くそというよりは、ふざけて雑に描かれたという感じで、とても貧相な体だ。

そのヘンテコな僕が何をしているのかというと、山を登っている。気づけば僕は、夢の中のヘンテコな僕と連動しはじめ、次第に体が熱くなり、息が上がってきた。第三者的だった視点は主観映像に切り替わり、今まさに僕は斜面を登っている。はたから見えていた時よりもずっと急な山だ。必死になって登ろうとするけれど、文字通り棒になった足が、体が、言うことを聞いてくれない。前に進めず苦しんでいるのに、相変わらずサングラスをかけたまま笑顔をキープしている。まるでちぐはぐだ。不気味だし、明らかにおかしいシチュエーションにいるにもかかわらず、夢の中の僕はこの状況を疑っていない。登った先に何があるのかもわからないのに、目的もないのに、ただこの山を登ろうと。

ラップグループ「ノーバディノウズnobodyknows+」の「TTTロードル」は今から21年前の大ヒット曲だが、2022年に、THE FIRST TAKEでピックアップされたから若い世代の方でも知ってる人は多いだろう。あの曲のミュージック・ビデオは今でもどこかで見れるのだろうか？

というのも、そのビデオの終盤、nobodyknows+のメンバーたちが合成映像で山を登るシーンがある。それに似ている！

nobodyknows+は山を登りきるが、ヘンテコな僕は諦めたのやら飽きたのやら、斜面を星のカービィによるところろと転がっている。もう顔から下の棒人間の部分はなくなっていた。表情のせいだろうか、楽しそうにすら見える雰囲気坂を転がりながら、「目が回っちゃうなあ。」と言ったところで目が覚めた。実際にこのセリフが口に出た

のかはわからないが、寝言ってこんなふうに出るんだな、と妙に冷静な自分がいた。

摩訶不思議な一年の始まりである。2025年になって初めての夢の中で、僕は絵文字になっていた。登山する絵文字。自由度でいえば、しゃべる機関車のようなものだ。自分の中から出てきたアイデアだとは到底思えない。

どんな夢であっても、そんなのおかしい、そんなの無理だ、と断定的に言うべきではない。自由な発想、想像力を潰してしまうのはいつだって否定的な言葉だ。

優秀な科学者ほど、突拍子のない夢であっても「それは絶対に不可能だ」とはきつと言わないだろう。というより言えないのだ。たとえば、タイムマシンの存在を論理的に否定することは誰にもできない。これまで世になかった技術が次から次へと生まれてきているのに、また別の新たな発明や技術革新が起こるのを否定するなんて誰にできる？

— あるかもしれない。

— きつとあるんだ。

子供は生まれながらにしてその視点に立っている。

それなのに、「成長」という過程の中でネガティブな情報にふれて、

— あるはずがない。

— できっこない。

と無限の可能性を秘めた翼をそつと折りたたんでしまう。

僕はそれはかなしいことだとおもった。

貪欲であれ、愚かであれ、という言葉の深さを思い知るの
である。

最後に、最近テレビCMで耳にして素敵だと思った言葉
をお借りしたいと思う。

「大人こそ、いろんな経験を経た上で、すごい可能性があ
るんじゃないかな」

元サッカー日本代表キャプテン 長谷部誠